

V 調査のまとめ

1. 瓦堂について

今回の調査において中世の溝からの出土ではあったが、平安時代に位置づけられる瓦堂の破片が検出され、在地社会における古代仏教信仰のひろがりを考える上で貴重な資料を得ることができた。

瓦堂は、瓦塔と同じく木造建築を模して造られた瓦製品で、「瓦金堂」とも呼ばれている。入母屋造り屋根の「堂」形のことを指し、正面が柱間3間で入口を開け、妻側を柱間2間組物3間とするものが多い（高崎 1990）。全国で200箇所以上の出土地が知られている瓦塔に比べ、出土例がきわめて少なく、その分布も関東地方に集中したあり方を示している。

管見にふれた瓦堂の出土例は、宮城県1例、茨城県1例、栃木県1例、群馬県4例、埼玉県8例、千葉県5例、出土地不明1例の合計21例が確認されたにすぎない（註1）。このうち全体の形状の判明するものは、わずかに美里町東山遺跡例（横川他 1980、今泉 1993）と千葉県谷津遺跡例（相京・池田 1986）の2例が知られるだけである。屋蓋部の破片がほとんどで、細部の特徴について不明な点が多い。また、瓦堂に関する論考も形態的特徴と性格について分析を行った高崎光司氏の研究があるにすぎない（高崎 1990）。

最近、東山遺跡出土の瓦塔・瓦堂の解体修復作業の過程において、当初単層の堂に復元されていた瓦堂が再検討の結果、重層の堂であることが明らかとなった（今泉 1993）。管見では、鳩山町柳原A遺跡（渡辺他 1991）、群馬県丸山北窯跡（太田市 1996）から出土した瓦堂の破片の中にも重層と考えられる部位が含まれていることから、重層構造のものが基本形であった可能性も十分考えられ、今まで単層に復元されていた資料の見直しの必要が生じている。

本稿では、従前の瓦塔研究の成果を踏まえ、当遺跡から出土した瓦堂の編年的位置づけを中心に検討を行いたい。

まず、出土状況について簡単にふれておく。前述し

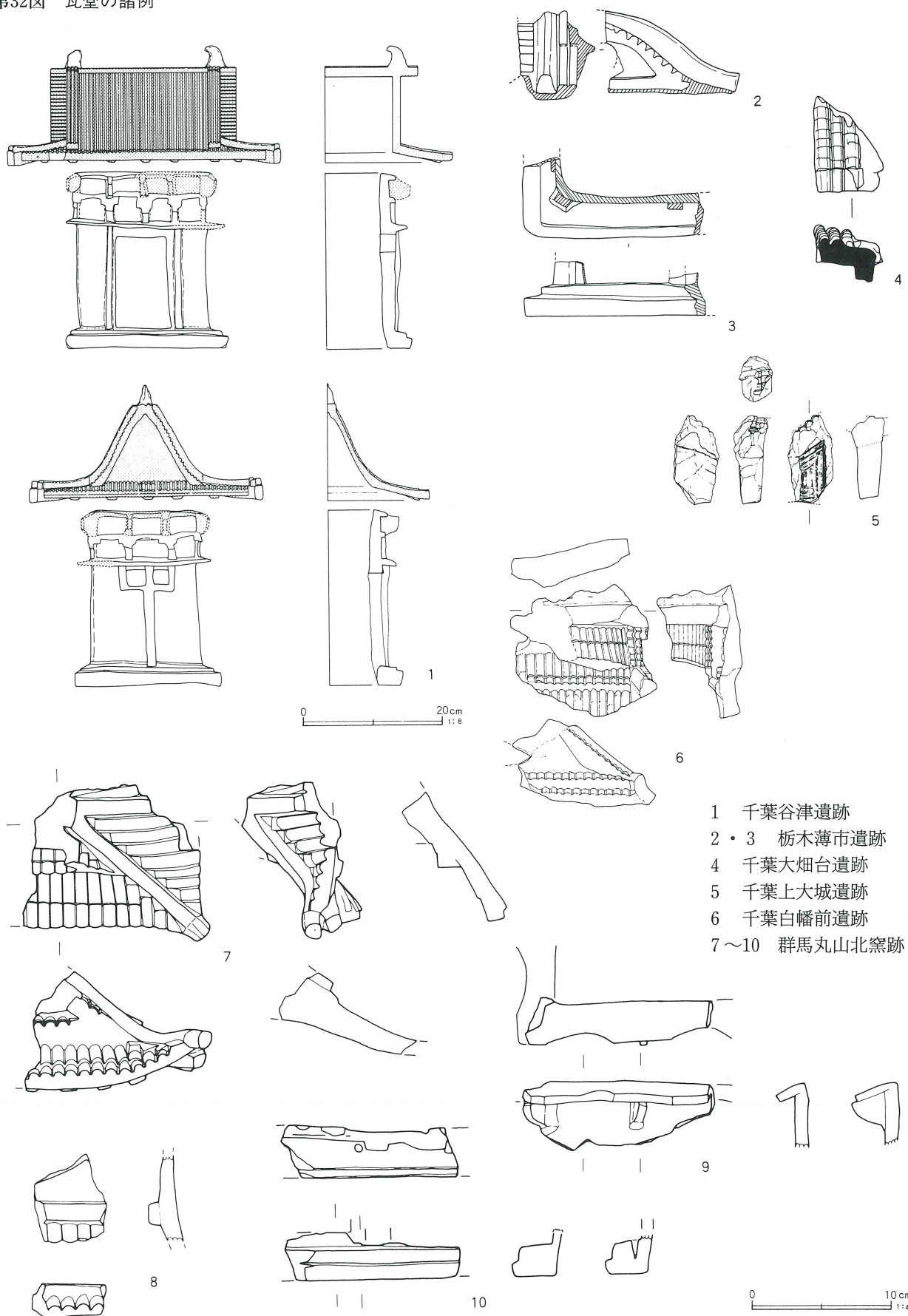
たように本瓦堂は、13世紀後半から14世紀前半頃の中世陶器とともに溝の覆土中から出土しており、直接遺構に伴うものではなく、流れ込みと考えられる。従って、出土状況から本瓦堂がどのような場所に安置され、仏教信仰の中でどのような使われ方をしていたのかを具体的に復元することは困難である。しかし、周辺には8世紀後半から9世紀前半を中心とする竪穴住居跡群が所在していることから、付近に「仏堂」的な施設が建立されていたことを想定することはさほど無理のないように思われる。いずれにせよ、結論は今後の調査の進展に期待するほかない。

次に、本文中でもふれているが本瓦堂の形態的特徴について説明する。

出土した瓦堂は入母屋造りの屋蓋部の破片で破風の部分に相当し、大棟や軒先など他の部位を欠損する。屋蓋部には通有の瓦塔と同じく半截竹管状工具の押し引きによって丸瓦が表現されている。注目されるのは平側の地葺きと妻側の掛瓦で幅の異なる2種類の工具を用いて丸瓦を表現している点である。つまり、地葺きの丸瓦は幅8mm、深さ3mmを測り、遺存部に継ぎ目が1箇所認められるのに対して、掛瓦は幅5mm、深さ2mmの幅の狭い工具を用いている。さらに、瓦堂の屋蓋表現に多くみられる鋸葺屋根を模した破風下の二段の地葺きが、本瓦堂では妻側の遺存部に明確でないことも特徴のひとつとして挙げられる。

破風の中央には三角形の透孔が切り抜かれ、その縁に細線による線刻が施されている。透孔の形態は美里町富士山台遺跡例（横川 1980）のような不整三角形とは異なり、比較的形の整ったものである。これは単に焼成における空気抜きを目的とした造作でなく、木造建築の破風を写實的に表現しようとしたものと推定される。降棟は幅1.2cmの断面矩形を呈する隆帯状に作られ、端部を欠損していた。また、隅棟はヘラによって削り出された基部をわずかに残し、本来隆帯状に作

第32図 瓦堂の諸例



られていたことが分かる。内面は丹念にヘラケズリを施している。軒先部分を欠損しているため、残念ながら垂木等の表現は不明である。

本体部分の成形は基本的に粘土板によって形作られ、それに粘土紐を貼付して妻側の掛瓦や降棟、隅棟等の細部を作り出している。土師質焼成で、橙褐色をした柔らかな焼き上がりである。胎土には土師器と同様に多量の角閃石、赤色粒子等が含まれている。

このように本瓦堂は、最近の研究で編年基準として着目されている斗拱部の変化(松本 1983、高崎 1989)や軒裏垂木表現(池田 1995・1996・1998)などの細部の特徴が不明瞭であるため、その年代を俄かに推断することは至難である。翻って本瓦堂の特徴を列記すれば、瓦や降棟などの表現が全体に丁寧で、特に破風の中央に三角形の透孔を施し、木造建築を写實的に表現しようとした意図を読み取ることができる。さらに、焼成は土師質で、比較的硬質に焼き上げられている点などが挙げられる。

そこで、このような特徴を示す本瓦堂が、瓦塔全体の変遷過程の中でいかなる段階に位置づけられるのか知るために、その大略について概観しておきたい。

まず、瓦塔の系譜関係については、中国の陶屋の影響があるとの説(松本 1984)もあるが明確ではなく、国内において木造の堂・塔や木製の厨子などを模倣して成立したとする説が有力である(上村 1991)。瓦塔の出現は7世紀後半に位置づけられる滋賀県衣川廃寺例(藤沢 1975)が最も古い例であるが、この時期のものは他に見当たらず、8世紀代になり東海、北陸、関東等の各地で出土例が増加している。そして8世紀末から9世紀前半までの間に最盛期を迎え、9世紀後半には急速に衰退していったものと考えられている。

一方、瓦堂の出現形態については必ずしも明確ではないが、現状における出土例から考えると瓦塔よりも遅れて出現し、瓦塔の最盛期にあたる8世紀末から9世紀前半にかけて集中的に作られたと考えられている。基本的には瓦塔とセットになって建物の内部に納められ、小伽藍的空間を形成していたものと想定され

る(高崎 1990)。

さて、管見にのぼった瓦堂について概観してみるとその多くが土師質焼成のものに限られており、瓦塔の変遷過程の中では須恵質焼成のものに後出する段階に位置づけられる。また、屋蓋部の瓦表現手法に注目すると、池田敏宏氏の分類による「幅広工具押し引きB手法」と「幅狭工具押し引きA手法」の2種類に大きく分けることができる(池田 1995)。

前者の例としては狭山市宮地遺跡例(狭山市 1986)、宮城県多賀城廃寺例(桑原・高野 1990)、千葉県白幡前遺跡例(大野 1991)、群馬県丸山北窯跡例等が知られる。全体に鋸葺屋根を写實的に表し、瓦の継ぎ目が多節のものが多く、古相を示している。

一方、瓦堂出土例の大半が後者の「幅狭工具押し引きA手法」によって丸瓦を表現しており、その代表例として県内では美里町東山遺跡例、同富士山台遺跡例、日高市若宮遺跡例(中平 1983)等が認められ、本瓦堂もこの分類に含まれる。また、周辺では栃木県薄市遺跡例(秋本 1988)、千葉県谷津遺跡例等が類例として挙げられる。これらの一群は高崎氏の瓦塔編年においてⅢ期の指標とされた、簡略化した組物表現や土師質焼成等の特徴を示すものがほとんどで、8世紀末から9世紀前葉を中心とした年代に位置づけられている(高崎 1989)。

このように本瓦堂は、屋蓋部の瓦表現が池田氏の分類による「幅狭工具押し引きA手法」によって表現され、土師質に焼かれていることから東山遺跡出土瓦堂に類似した特徴が認められる。東山遺跡例の年代は共伴した須恵器等の年代観から8世紀末もしくは9世紀初頭に比定されており、本瓦堂も近接した時期の所産と捉えておきたい。

以上、瓦表現等を手がかりとして本瓦堂の編年的位置づけについて検討してきたが、資料的な制約もあり、その性格にまで言及することはできなかった。今後は集落内部における仏教信仰の存在形態の解明が大きな課題として残されている。